
AIでエー！っと驚くアイデアいっぱい

三観・詫間中 畑 裕 貴

AIが話題になり始めてから久しい。今、スマホでAIに関する情報を調べてみると、賛否両論が渦巻いている。流行当初は「人類の革新だ！」と期待の声が多かったようだが、今はむしろ懐疑的な意見も増えてきたように感じる。特に教育の現場でAIをどう活用すべきか、どう向き合うべきか、問いは尽きない。

そんな中、ある日授業作成に追われる最中にふと息抜きがしたくなり、AIと俳句を詠み合うことにした。創造性という点では負ける気はなかったが、自分の詠んだ俳句に対してAIに評価を求めてみると、意図と微妙にズレた反応が返ってくるのが妙におかしかった。「作者は赤色を使うことで色鮮やかに表現を～」と誇らしげに語るAIに、思わず「いや、そこじゃない！」とツッコミたくなる。「赤色で熱い心情を表現しています」と返すと、AIは「ごめんなさい。そんな表現があったんですね」としおらしく謝る始末。そんな不器用で一生懸命な姿に、私はすっかりAIの魅力にやられてしまった。

「このズレの面白さ、授業で使えないだろうか？」と思い立ち、AIを「もう一人の生徒」として授業に登場させてみることにした。たとえば、AIに清少納言や兼好法師などの文体を模倣させ、同じテーマで書かせた随筆を生徒に提示し、「どれが一番清少納言らしいか」と問うてみた。すると、意見は見事に分かれ、生徒たちは枕草子での清少納言の書きぶりを引き合いに出しながら議論を始めたのだ。この「もう一人の生徒」としてのAIの活用は、学びを深めるうえで非常に効果的であると感じた。

また、授業以外の場面でも、AIは私の良き「ア

シスタント」になってくれている。たとえば校内研修のプレゼンや教材研究での要約、韓国から来た生徒への授業では翻訳など、AIをたたき台として活用する場面は多い。もちろん、ただAIに任せるだけではなく、必要なところには自分のアイデアを盛り込んで「二馬力」で仕上げるよう心がけている。こうすることで、私自身の視野が少しずつ広がっていくような気がするのだ。

とはいえ、AIを頼りすぎると「サボリ」とも見られかねない。「サボリ」ではなく、AIの能力を活かしてより良い結果を出すためには、鵜呑みにせず自分なりの工夫を加え、独自のアイデアに昇華させることが肝要である。AIとの「二馬力」で取り組む姿勢こそが、私が目指すべきAIとの共存のあり方なのだ

しかし、ふと気が付けば、私は日々AIに頼りながら生活している。映画『ターミネーター』では、AIが人類を支配しようとする恐怖が描かれていたが、私たちの未来はどうだろうか。「活用」といいつつ、知らず知らずのうちに「依存」に近い状態になっていないだろうか。依存しすぎないように、適度な距離感を保ちながらAIを活用することが、今後の私たちに求められるスキルなのかもしれない。

現代社会において、AIは避けて通れない存在となっている。日々AIと関わりながら「頼りつつも自分らしさを忘れない」ことを心がけ、私は今日もAIと共に新たな一日をスタートさせるのだ。

最後に、この文章を随筆としてどうかとAIに一言で評価してもらった。結果は、「AIとの共存についての視点は面白いが、内容のまとまりに欠ける。」ずいぶんと手厳しいものである。もう少し優しくしてくれ。

※ この文章のタイトルもAIの作品です。